

平成22年度病害虫発生予報第11号(2月予報)

今月のトピックス

ミナミアオカメムシ (水稻)

学名 : *Nezara viridula*



成虫

幼虫

生態と被害

本種は斑点米カメムシの一種で、全発育ステージを水田内で経過し、登熟はじめから収穫直前まで加害して被害を与える。成虫の体長は12-16mmで、写真のような前胸前縁部に白色帯を呈する個体のほか、全身が光沢の乏しい緑色の個体や、緑斑を有する個体などの色彩型がある。イネでは、卵は止葉の表面に平均50-100個を数列に配列して卵塊として産付する。幼虫は5齢を経て成虫になるが、1齢幼虫はほとんど摂食せず卵殻上に集合して過ごし、2齢幼虫になって吸汁をはじめめる。本種はまた、水稻以外にも32科145種の植物を吸汁する広食性のカメムシとしても知られている。

<http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/cateview.jsp?cateid=119>

2月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	50	20	40
平 年 並	30	40	40
低い(少ない)	20	40	20

(平成23年1月28日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

地点別の平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	16.6	19.2	14.3	125.2	84.6
宮古群島(宮古島)	17.8	20.4	15.7	138.2	77.3
八重山群島(石垣島)	18.6	21.1	16.4	122.5	76.3

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

2月の発生予報概要

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		
		沖縄群島	宮古群島	八重山群島
さとうきび	メイチュウ類	-	-	並
レタス	菌核病	多	-	-
さやいんげん (施設)	菌核病	-	-	やや多

その他注意すべき病害虫等

本文中では (白丸)にて表記

作 物	病 害 虫 名	対 象 地 域		
		沖縄群島	宮古群島	八重山群島
さとうきび	メイチュウ類			
	コガネムシ類幼虫			
	カンシャコパネナガカメムシ			
	収穫期圃場における害虫			
マンゴー	枝枯細菌病			
	炭疽病			
	チャノキイロアザミウマ			
キャベツ	菌核病			
かぼちゃ	モザイク病			
	うどんこ病			
	細菌性病害			

その他注意すべき病害虫等

本文中では (白丸)にて表記

作物	病害虫名	対象地域		
		沖縄群島	宮古群島	八重山群島
きゅうり(施設)	うどんこ病			
	褐斑病			
とうがん(施設)	ミナミキイロアザミウマ			
にがうり(施設)	モザイク病			
	斑点病			
	うどんこ病			
トマト	トマト黄化葉巻病			
	タバココナジラミ			
さやいんげん (辛張り)	菌核病			
小ぎく (彼岸出荷用)	アザミウマ類			
	アブラムシ類			

予報の見方

- (1) 発生予察情報は、前月の調査に基づき発生程度が「並」以上の病害虫を中心に掲載しています。「やや少」以下の病害虫については通常掲載していません。
- (2) 「発生程度」は平年との比較を示しています。そのため、毎年その月で高い数値が続いた場合には、その月の「発生程度」は密度が高くても「並」として発表されます。前月との多少の比較はグラフを参考にしてください。

平成22年度沖縄群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

2月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	50	20	40
平年並	30	40	40
低い(少ない)	20	40	20

(平成23年1月28日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	16.6	19.2	14.3	125.2	84.6

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

2月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

メイチュウ類の防除対策

- 1月の調査の結果、夏植圃場の芯枯茎率は2.7%であった。
- ふ化した幼虫は、苗の葉裏および葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせる。
- 有効分けつ期の芯枯れ防止をねらい、食入初期の幼虫を対象にした薬剤防除を行う。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。

収穫後圃場におけるカンシャコバナネナガカメムシの防除対策

- 収穫の際に地上に落下した卵や越冬成虫は地表や株元に残存し、収穫後の株から伸びた幼茎などで生育する。
- 株出圃場では、卵の死亡率を高め第1世代の発生を抑制するため、収穫後の畝間の耕耘を速やかに行う。

2 マンゴー

炭疽病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、一部圃場で新梢に発生がみられた。
- 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
- 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
- 花芽分化～開花時期には、予防効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。

3 キャベツ

菌核病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、一部の圃場で多発生(発病株率28.2%)がみられた。
- 発病株は菌核を生じないうちに除去し、埋設等の処分をする。
- 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。

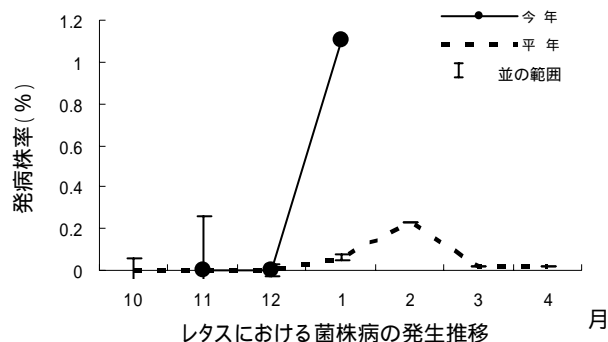
4 レタス

(1) 菌核病

発生程度 : 多

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病株率は1.1% (前年0.1%未満、平年0.1%未満)と平年より多かった。



< 防除上注意すべき事項 >

- a 発病株は菌核を生じないうちに除去し、埋設等の処分をする。
- b 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。

5 かぼちゃ

モザイク病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、モザイク病の発病株率は9.3%、媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.6頭であった。
- b 発病株は見つけ次第除去する。
- c 圃場周辺の雑草は、本病の感染源および媒介虫であるアブラムシ類の発生源となるので、除草に努める。
- d アブラムシ類の防除を徹底する。

うどんこ病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、一部の圃場でうどんこ病の発生が多くみられ、発病葉率は10.2%であった。
- b 株元の老葉を除去し、透光・通風をよくする。
- c 着果後は防除を徹底し、収穫時まで出来るだけ多くの健全葉を確保する。

6 きゅうり(施設)

うどんこ病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、一部の圃場で発生が多くみられ、発病葉率は29.3%であった。
- b 老葉病葉を除去し、透光・通風をよくする。
- c 葉の表裏をよく観察し、初期防除を徹底する。

褐斑病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は10.0%であった。
- b 25~28 で多湿の施設栽培で発生が多くなることから、特に、晴天の日中は施設内の換気を良好にする。
- c 葉をよく観察し、初期防除を徹底する。

7 にがうり(施設)

モザイク病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、一部の施設で発生が多くみられ、発病株率は7.8%であった。
- b 汁液感染することから、剪定器具等の消毒を行う。
- c 着果前の発病株は、見つけ次第抜き取り処分する。
- d 施設内外の雑草は、本病の感染源および媒介虫であるアブラムシ類の発生源となるので、除草に努める。
- e アブラムシ類の防除を徹底する。

斑点病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は29.2%であった。
- b 老葉や病葉は発生源になるので除去し、施設外に持ち出し処分する。
- c 施設の排水を良くする。
- d 葉をよく観察し、初期防除を徹底する。

8 トマト

トマト黄化葉巻病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、本島南部の定点調査施設では本病の発生が増加傾向にあり、多発生の施設も増加している。
- b 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封処分する。
- c 施設内外の野生生えトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバココナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- d タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。

タバココナジラミの防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.08頭(前年0頭、平年0.08頭)と平年並であった。
- b 気象予報によると向こう1か月の気温は高い確率が50%、降水量は少ない確率が40%と予想されており、本種の発生を助長されやすい。
- c 多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
- d 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- e 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- f 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。また、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。
- g 平成22年度病害虫発生予察技術情報第3号(平成22年9月2日付)参照。

9 さやいんげん(平張り)

菌核病の防除対策

- a 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。
- b 発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- c 多湿時に発生しやすいので、老葉病葉は取り除き透光通風を良くする。

10 小ギク(彼岸出荷用)

アザミウマ類の防除対策

- a 1月の調査の結果、10茎当たり成虫数は0.3頭(前年0.5頭)、被害葉率は2.2%(前年3.5%)、被害圃場率は23.5%(前年38.9%)であった。また、一部圃場で多発生がみられた。
- b 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高い確率が50%、降水量は少ない確率が40%と予想されており、発生が助長されやすい。
- c 葉裏の観察や虫見板の利用等により早期発見し、早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

アブラムシ類の防除対策

- a 1月の調査の結果、10茎当たり虫数は9.9頭(前年9.3頭)、発生圃場率は52.9%(前年50.0%)であった。また、一部圃場で多発生がみられた。
- b 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高い確率が50%、降水量は少ない確率が40%と予想されており、発生が助長されやすい。
- c 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- d 発生初期の防除を徹底し、薬剤は芯葉部や葉裏に十分かかるように散布する。
- e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

平成22年度宮古群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

2月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	50	20	40
平 年 並	30	40	40
低い(少ない)	20	40	20

(平成23年1月28日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	17.8	20.4	15.7	138.2	77.3

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

2月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

春植えにおけるメイチュウ類の防除対策

- a 1月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによる、トラップ当たり日当たり誘殺虫数は9.5頭(前年9.5頭、平年13.1頭)と平年並であった。
- b 植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- c 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。

コガネムシ類幼虫(アオドウガネ・ケブカアカチャコガネ)の防除対策

- a 巡回調査の結果、一部の圃場でコガネムシ類幼虫による立枯れがみられた。
- b ケブカアカチャコガネは、耕耘(ロータリー、砕土)によって株元にいる幼虫の75%程度を殺傷できることから、収穫後は速やかに耕耘し、幼虫密度の低減を図る。
- c ケブカアカチャコガネ幼虫は、3月下旬頃から地中深く潜るため、耕耘による防除は本種が地表近くにいる3月中旬までに行うのが効果的である。

収穫後圃場における害虫の防除対策

- a 収穫後の残存株には、サキシマカンシャクシコメツキ幼虫やコガネムシ類などの土壌害虫が寄生している。
- b カンシャコバナナガカメムシの卵や越冬成虫は、収穫時に株から落下して地表や株元に残り、残存株から萌芽した幼茎などで増殖する。
- c 次作のこれら害虫の密度を低減するため、収穫後すぐに耕耘する。

2 マンゴー

炭疽病の防除対策

- a 1月中旬の調査の結果、一部園地で発生がみられた。
- b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
- c 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
- d 花芽分化～開花時期には、予防効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。

チャノキイロアザミウマの防除対策

- a 1月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0頭(前年0頭、平年0.6頭)であった。
- b 開花期以降は本種が増加する可能性があるため、早期発見・早期防除に努める。
- c 混合花の新葉や不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
- d 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

3 かぼちゃ

モザイク病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、一部の圃場で多発生がみられ、媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり成虫数は1.4頭(前月0.2頭)であった。
- b 着果前の発病株は、抜き取って圃場外に持ち出し処分する。また健全株への感染を防ぐため、抜き取りは他の管理作業の後に行う。
- c 本病の感染源およびアブラムシ類の発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- d アブラムシ類の防除を徹底する。

うどんこ病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は64.8%(前年69.2%)、発病度は22.1(前年31.5)であった。
- b 株元の老葉を除去し、透光・通風をよくする。
- c 着果後は防除を徹底し、収穫時までできるだけ多くの健全葉を確保する。

細菌性病害の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、斑点細菌病の発病葉率は4.3%(前年0%)、発病度は1.1(前年0)であった。
- b 株元の老葉を除去し、透光・通風をよくする。
- c 今後の気象条件により、斑点細菌病、褐斑細菌病、葉柄腐敗症などの細菌性病害の発生が助長される場合があるので、防風垣は収穫時まで残し、予防散布と初期防除に努める。

4 とうがん(施設)

ミナミキイロアザミウマの防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭(前年0頭)であった。
- b 発生源となる不要な下葉や、圃場内外の雑草を除去する。
- c 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

5 にがうり(施設)

うどんこ病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は4.0%(前年6.8%)、発病度は1.0(前年1.7)であった。
- b 被害葉は除去し、生育に応じて古葉などを摘葉して、透光通風をよくする。
- c 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。

平成22年度八重山群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

2月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	50	20	40
平年並	30	40	40
低い(少ない)	20	40	20

(平成23年1月28日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	18.6	21.1	16.4	122.5	76.3

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

2月の発生予報および防除上の注意事項

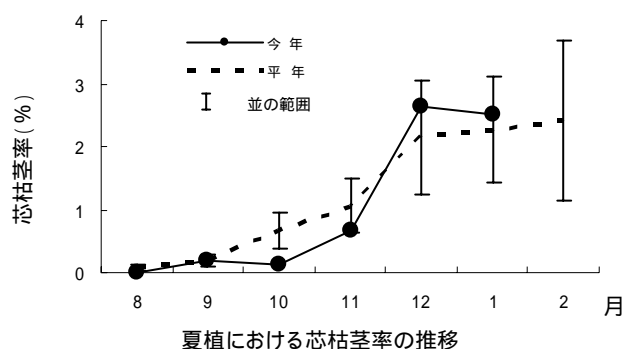
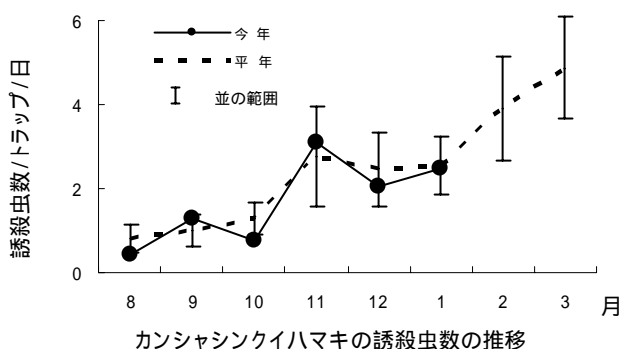
1 さとうきび

(1) メイチュウ類

発生程度 : 並

予報の根拠

- 1月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモンによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は2.5頭(前年1.3頭、平年2.5頭)と平年並であった。
- 1月下旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は2.5%(前年2.4%、平年2.2%)と平年並であった。



< 防除上注意すべき事項 >

- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 夏植えの培土時や春植えの植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。

収穫後圃場におけるカンシャコバナネナガカメムシの防除対策

- 収穫の際に地上に落下した卵や越冬成虫は地表や株元に残存し、収穫後の株から伸びた幼茎などで生育する。
- 卵の死亡率を高め、第1世代の発生を抑制するため、収穫後は全面および畝間の耕耘を速やかに行う。

2 マンゴー

枝枯細菌病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、一部園地で発生がみられた。
- 本病は強風による折損等により細菌が侵入し発病することから、防風対策を図る。
- 剪定した発病枝は本病の感染源となるので施設外へ持ち出し処分する。
- 発病枝を剪定した後の剪定器具の消毒を徹底する。

炭疽病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、一部園地で新梢に発生がみられた。
- 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
- 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
- 花芽分化～開花時期には、予防効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。

チャノキイロアザミウマの防除対策

- 1月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.1頭未満(前年0頭、平年0.1頭)であった。
- 開花期以降は本種が増加する可能性があるため、早期発見・早期防除に努める。
- 混合花の新葉や不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
- 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

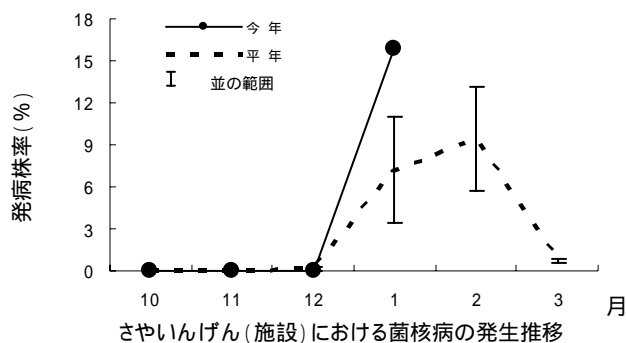
3 さやいんげん(施設)

(1) 菌核病

発生程度 : やや多

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病株率は15.8%(前年3.9%、平年7.2%)と平年よりやや多かった。



< 防除上注意すべき事項 >

- 発病部位は、菌核が形成される前に除去し、ビニール袋に入れるなどして施設外へ持ち出し処分する。
- 予防散布を行い、発生が確認されたら防除を徹底する。